

(海外)・国内) 出張報告書 (学生用)

2015 年 5 月 1 日提出

氏名	日尾野隆大
所属	動物疾病制御学講座 微生物学教室
学年	博士 4 年
出張先	米国 ジョージア州 Athens
出張期間	2015 年 4 月 12 日 - 4 月 17 日
目的	9th International Symposium on Avian Influenza およびそれに付随する OFFLU の会議に参加するため

活動内容 (2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

本出張では米国ジョージア州 Athens にて行われた 9th International Symposium on Avian Influenza に参加すること、および同時に開催される OFFLU (OIE/FAO Network of Expertise on Animal Influenza) の会議に出席することを目的とした。

ジョージア州 Athens は Atlanta より車で 2 時間ほどのところにある都市で、今回の学会・会議の会場となったジョージア大学がある町である。学会の参加者は世界各国の鳥インフルエンザ診断に携わる国立機関、研究所と大学の関係者が中心であった。また、Atlanta には米国の Center for Disease Control (CDC) と United States Department of Agriculture (USDA) の研究所があることから、これらからも多くの参加者がいた。「9th International Symposium on Avian Influenza」という名の通り本学会は鳥インフルエンザに焦点を絞った学会である。前述の様に、参加者の多くが、「疾病の制御」に焦点を置いた研究をしていることから、必然的に演題の多くは基礎ウイルス学やウイルスの分子生物学解析よりも、鳥インフルエンザの発生報告やサーベイランスの結果報告、新規診断法の評価についてのものであった。特に昨年から多くの報告がある Clade2.3.4.4 に属する H5 亜型高病原性鳥インフルエンザウイルスの発生と分子疫学的解析に関する話題が多く、このウイルスが他の H5 亜型高病原性鳥インフルエンザウイルスと比較してニワトリとシチメンチョウに対する病原性がやや低いこと、系統的に韓国・日本分離株とアメリカ分離株では少し異なることなどが報告された。さらに中国より、このウイルスが抗原変異株であり新たなワクチン株を樹立するとの報告があり、今後 H5 亜型

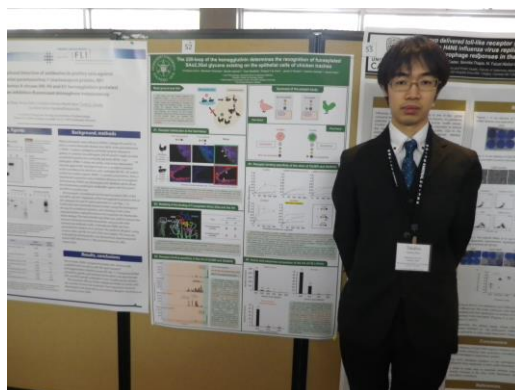


写真 1. ポスターの前にて

高病原性鳥インフルエンザウイルスのさらなる抗原変異が懸念される。学会は家禽（poultry session）と野鳥（wild bird session）の2つのセッションに分かれるという構成を取っていた。現在、家禽のインフルエンザウイルスが野鳥を介することで国境を越えて持ち運ばれることが問題となっており、また野鳥でのインフルエンザの制御のためには家禽での発生を無くすことが重要であることを踏まえると、本来綿密な連携をとるべき家禽のインフルエンザを研究する人々と、野鳥のインフルエンザの研究をする人々が別々の場で議論を交わすことになっていたというのは少々残念であった。

OFFLU の会議での主題はワクチンに関する事柄と、OIE レファレンスラボトリーと各国の診断機関の技術向上のための試み「Ring Trial」に関する事柄が大きな点を占めていた。ワクチンに関しては株の更新の必要性・重要性が再確認されていたが、原則的に鳥インフルエンザに対するワクチンを使わない日本にとってはあまり関係のない話であった。一方でこのような話し合いが持たれることから、鳥インフルエンザワクチンの使用が未だに国際的に容認されており、摘発淘汰を旨とした体制に移行することがまだまだ難しいと認識されていることが伺えた。Ring Trial に関しては当研究室も参加しており、私も実際の作業に携わってきた。Ring Trial は現在のところ USDA の大きな協力の下成り立っており、今後の継続的な実施のためにも負担の分散が必要であることが確認された。また、全体の技術向上のために、この取り組みを通してマニュアルのようなものを立ち上げることを目標とすべきだということが議論された。技術向上のために Ring Trial を継続すること、すべての動物種に応用可能な血清診断法を確立すること、卵培養に負けない細胞系でのウイルス培養システムを立ち上げること、全ウイルス遺伝子の迅速な解析システムを樹立することを OFFLU の目標とし活動することが確認された。

最後に、私の発表について触れたい。私の発表は鳥インフルエンザウイルスのレセプター特異性に関するポスター発表だった。糖鎖生物学の要素を多分に含み、鳥インフルエンザウイルスの基礎ウイルス学を題材とした私のポスターは「大人気」というわけにはいかなかったが、それでも数人の研究者が足を止めてくれ、解析手法等に関してディスカッションができた。ポスターの人気の様相とは反対に、ポスターのデザインと研究内容が評価され、光栄にも学会の「Student Poster Award」を頂くことが



写真 2. 光栄にもポスター賞を頂いた。名前を呼ばれたときは正直驚いた。

できた。今回の出張を総括すると、経験の上でも実績の上でも非常に生産的な出張であったと思う。

指導教員確認欄	所属・職・氏名： 微生物学教室 教授 迫田 義博 印
---------	-------------------------------------

※1 電子媒体を e-mail で国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出するとともに、指導教員が押印した原本を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。

提出先：国際連携推進室・リーディング大学院担当

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp